汎美、

汎美便り
vol.42

特 集

『新型コロナ禍の今、アートは?』

発行／2021年3月　汎美術協会事務局

汎美便り vol.42

CONTENTS

巻 頭 言

汎美術協会 代表　根岸　節 1

特 集／新型コロナ禍の今、アートは？

コロナ禍の展覧会運営　汎美術協会 事務局長　大野善孝 2
コロナ禍のパラレルワールド――“アート”の所在は?　木虎和生 3
制作は続く、美術活動は続く　中西祥司 5
新型コロナウイルスに思う　再生アーティスト　いなずみくみこ 8
コロナ禍での私のアート作品　なごみデザイン研究所　岩橋格 10
新しい感性と世界観の往還　久保進 11
自粛という引き分け　成田雄智 12
コロナ禍の下に思う　小杉春見 13
私の考えるアートは　三竹康子 14
作品のことをより強く意識　丹羽千賀子 14
コロナ禍に思う　吉澤浄子 15
テレワークとリモートと陶芸窯と YouTube と私　関根昌之 16
趣味絵師風情　描き主　矢作拓也 17
再発見 コロナ禍の美術館にて　花島平 18
コロナ禍の中、私　敷地和子 19
ピュシスとしての自然　島田隆一 20
雑感　馬場温子 21
新型コロナってなんだ　小川猛志 22
アートの中に自分を見つける　岩田洋子 23
コロナの年 個展までの日々 ―日記から―　廣瀬万喜子 24
夜明け前　佐川毅彦 25
コロナ禍でのアートについての『茜モノローグ』　愚聴風　大辻敏成 26

随 想

汎美について今思うこと　相京三千代 31
汎美と私の絵心　根岸節 32
トランペットと作品制作　渋谷淳一郎 34
社会変化と世代交代に考えること　編集係　三竹康子 35
アナログ時代の汎美便り　編集係 36

巻末付録　邂逅のおんな達 37
編集後記 ..... 裏表紙

表紙デザイン　三竹 康子

巻　頭　言

汎美術協会 代表　根岸 節

今回はコロナの状況下、残念ながらやむなく汎美展中止となりました。私達はこれに心折れることなく、逆に表現の想いを更に発酵させる機会と捉え、次の汎美展へ夢を繋ぎましょう。汎美展出品の方々のお心を繋ぐ「汎美便り」、今巻は「コロナ禍での表現の思い」の特集ですが、コロナ禍で、私は飼い猫の「チビタ」に別の視座を教えられました。

私達の標榜する「汎美の自由」は、平等に語り、想うがままに表現しあえるものであり、全てを、寒色も暖色も、正も反も、善も悪ですらも包み込んでしまう**「柔らかく大きな心」**と思っています。そして、全て個々の心身はもとよりその上にある宝玉＝万物の**生命を保証する自由**だと思います。私はこの「汎美の自由への道」をこころより愛しています。

ボタニカル・クロッカス
春寒料峭に健気に開くイノチ
（*photo by* 大辻）

特集／新型コロナ禍の今、アートは?

全世界文化のバランスが崩れ、人類の危機に面して、我々表現者は如何様に生きるか、その様々なかたちを見渡すところから見えるものを探ろうと、編集係が企画しました。全員に問い掛け、またあるときはお願いしてやっと集まったものです。ここから見えて来るものは何でしょうか。そしてあなたは如何お考えでしょうか。

※特集タイトルとの重複を避け、一部投稿タイトルを編集にて改題、調整しております。

（編集係一同）

コロナ禍の展覧会運営

汎美術協会 事務局長　大野 善孝

2020年春以来の新型コロナウイルス感染症の拡大により、東京都美術館、国立新美術館を発表の場としている多くの公募団体が展覧会を中止しました。

中止の理由は、勿論感染防止のためでしょうが、出品希望者の減少も理由の一つでしょう。会場に見合った出品者数を確保できなければ、充実した展覧会にはならないことを危惧した結果だと思われます。

ある大規模な公募団体の関係者に聞いた話ですが、出品規定を小品でも出品できるように改めて、出品者を確保する方針を立てたそうです。それでも出品者が集まらなかったのか、別の理由によるものかはわかりませんが、結局開催中止を決定したということでした。予算的に余裕がある大規模団体は別として、本会のような小規模な団体では出品者が減ることは出品料収入が減ることであり、当然予算的に苦しくなります。そのことも考慮して、定時総会で「2020汎美秋季展」の中止を決めましたが、「2021汎美展（第60回記念展）」はアンケートの集約から、一定程度の出品者数を見込めると判断し、11月29日の運営委員会で開催を決定しました。また、会期中の会場当番等の作業参加を多くの会員が引き受けてくれたことも開催を決める大きな要因になりました。

コロナ禍での展覧会運営は不安で一杯です。けれども一人一人が自由に、しかし責任をもって制作した作品を出品し、全会員が運営委員であり、ヒエラルキーがない本会の特性から生まれる相互の信頼と協調を武器に展覧会運営を行えば、「2021汎美展（第60回記念展）」を成功裏に終えることができるものと確信しています。

2020年の汎美展のように突然美術館が閉館になり、開催できなくなることがないように祈るばかりです。

〈 編集係註 〉大野事務局長の原稿を戴いた時点では、緊急事態宣言が発出されていませんでした。

コロナ禍のパラレルワールド ――“アート”の所在は？

木虎 和生

2020年、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナと表記）が世界に蔓延。12月末現在第三波の只中で、新たな変異株※1も出現し未だ終息が見えない。この一年を振り返るに、その影響の甚大さは今さら詳述するまでもないだろう。但し、ウイルスが“生物と非生物の中間”と表現されるように、そのメカニズム通り宿主に依存し増殖するのに対し、人間の側は、年齢や環境（地域、職種・立場、経済力等）によって受ける影響も、その感覚にも差がある。当然ながら人によって見える風景は異なるが、私がここで注目したいのは、それだけでは説明がつかない次のような“世界観の乖離”についてである。

●まるで並行世界（パラレルワールド）

コロナ禍での「BLM運動」「アメリカ大統領選挙」「日本学術会議問題」等における議論は、単なる意見対立にとどまらず、お互い別世界を生きているかのような異なる“事実”を掲げて相手を否定、まるで一つの出来事に対して正反対のストーリーを描く並行世界のようだった。すなわち「怒りの抗議活動⟷法と秩序を乱す犯罪」「民主主義の奪還⟷不正選挙による民主主義の死」「学問の自由の侵害⟷既得権益の改革」等々。立場や解釈の違いはあれど真実は一つのはずだが、切り取りやデマを含む情報を都合良く自らの主張に利用する様は、国や党派を超えて見受けられる“反知性主義※2”ではなかろうか？。

それは「自分が理解したいように世界を理解する態度」と評されるように、例えばSNS等で誰もが容易に情報を取得・発信できる中、或る出来事や意見に対する慎重な検討や確認を怠り、事実や専門知を蔑ろにするような振る舞いの事である。おそらくフィルターバブルやエコーチェンバーといった現象※3も関係しているだろう。

これらは“インフォデミック”と呼ばれたコロナ関連の情報の氾濫にも当て嵌る。WHOなど公的機関の発信さえ疑問視された感染源論争やマスク論争を始め、日本でのファクターX、PCR検査、インフルエンザとの比較、GoToキャンペーン、指定感染症の法律論、、、等々に溢れた両極端な声は、未知のウイルスによる科学的知見の不足にも一因はあるが、情報を見極め正確に伝える冷静さに欠けていたのではと思う。

●アートの所在

そんな様相は、コロナによる不安な心理とも呼応しているのかもしれない。そのうえ不要不急として存在意義を問われたり、先行きが見えず疲弊する今、日本では自殺者が増加傾向※4にあるという。震災の時と同様に人命救助の直接的な支援が急がれる事はもちろん、長期的な心のケアには人との関係性とともに音楽・芸能をはじめとする娯楽的な要素が有効だろう。加えて映像・文学・美術等アート全般には、もっと長い射程――癒しだけではない継承・警鐘・形象化の役割もあるのではないか？。

アート業界におけるWithコロナの試みとしては、観覧予約制、展示会場やセミナーのオンライン公開、ネット上のみのバーチャル作品展などが既に行われている。個々人の作品にも変化が有るかもしれないし無いのかもしれない。

在り方は様々だろう。そこで生み出された作品が、すぐさま世の中に貢献する方向ではないとしても、ゆくゆくは並行世界を解きほぐし繋ぐことが有るかもしれない。あるいは何ら価値の無いモノでしかないかもしれない。だとしても、その原初においてアートとは、まだ名前や形さえ無い内なる“核(コア)”を外に向かって表出させる術（すべ）として、存在して来たのではなかったか？。その成果は、時に理想世界を描き出して見せたり、宗教的儀式や威厳を演出するツールとなったり、宝物のような高い価値を獲得したり、はたまた時代を映す役割を担っても来ただろう。今や作品には美術史上の文脈や先端的解釈が必要とされたりするが､本来的にはそうした要請以上に､作り手自身の強い内発的動機によって生み出され､故に作品にこめられた核が魅力を放ち、その結果として他の誰かに作用し伝わっていく、、、それこそが“アート”の本質であり所在ではないのか？ 私自身は､そんなとりとめもなく儘ならない思いを抱えつつ、改めてこれからの制作を見つめようとしている。

※1 変異株

「変異種」との表記も見かけるが、正確には同じウイルス種の「変異株」。ウイルスは常に変異を繰り返し、既に数百確認され消えており、その中でイギリスやアフリカでの変異株が新たな拡がりを見せている。なお新型コロナは病名「COVID-19」､ウイルス名「SARS-CoV-2」だが、2002-03年流行のSARSとは別種。

※2 反知性主義

その概念は、政治史家のリチャード・ホフスタッターが『アメリカの反知性主義』(1963年）において、知的権威に対抗する実利的勢力を“反知性主義”とし、アメリカに特徴的な反動の歴史として記述。一方、神学者の森本あんりは『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』(2015年）で、信仰復興運動（リバイバル）のラディカルな「平等主義」を源流と捉え、知的エリート層の権力支配に拮抗し是正するポジティブな面を評価。このように解釈に幅があるが、アメリカでも日本でも肯定的な意味での反知性主義が自称される事はない。本稿ではその弊害に目を向け批判的に用いる。

※3 フィルターバブルやエコーチェンバーといった現象

フィルターバブル現象；

検索サイトのアルゴリズム(情報処理プログラム）が個人に最適化され過ぎた結果として、泡(バブル）のような狭い閉じた空間にとらわれ異なる情報から遮断される現象。

エコーチェンバー現象；

同質の人が集まる閉鎖的な空間でコミュニケーションを繰り返すことによって、特定の信念が増幅または強化されてしまう現象。

※4 日本では自殺者が増加傾向

前年(2019年)との比較で1～6月は減少、7月以降は連続で増加。一般的に経済不況と相関するが、自殺の原因は病気・人間関係など複合的。先進国の中で高めの自殺率（2019年人口10万人当たり自殺者；OECD平均11.3人/日本14.9人）と言われるが、取り組みもあり2003年の年間合計約3万4千人をピークに、ここ十年間は連続で減少し2019年は約2万人になっていた。それが今回のコロナ禍で増加に転じそうな状況。〔確定情報追記；厚生労働省がまとめた2020年の日本の自殺者数は、2019年より912人（4.5%）多い2万1081人。リーマン・ショック後の2009年以来11年ぶりに前年を上回り、人口10万人当たりの自殺者数も11年ぶりに増え16.7人となった。〕

制作は続く、美術活動は続く……

中西 祥司

テレビは新型コロナ情報を流し続ける。未だかつて経験したことが無かった、新型コロナ禍。室内で過ごす長い半強制的な自粛の期間。当たり前の日常を失い、非日常を日常とする。

例年通りに計画されていた展覧会が中止になり、人と会うことも儘ならず、ストレスの高まる日常。

制作意欲も衰え気味の中で、ドローイングを続ける。そして、作品を閉じ込められた室内から窓越しに見える風景に、自然を感じられることが、如何にありがたいか実感した。広い空が見える、流れる雲と太陽が繰り広げるダイナミックな風景、色彩の変化が素晴らしい。

我が家の出窓から見えるが、その富士山の夕景に友人は感激した。

壁に空いた外に開かれた穴！ いろいろな刺激を受け、思考を拡げていく。閉ざされた空間の空気穴だ。

絵画作品を壁に掛けることも、壁に穴をあけることではないか。

パブロ・ピカソは「他の人が自伝を書くように、私は絵を描いている」と。

地球の温暖化が進み、自然環境の驚異が増し、世界的に繰り返し起こる過酷な大災害、そしてコロナ禍だ。

「魂に飛び込む光たち No.52」[*1]

社会状況の様々な変化、深刻な社会の分断と階層化は進み、民度の低い政治家によって、日本の民主主義は崩壊の危機にある。

コロナ禍だからと制作を止める理由はないし、制作が出来ない訳ではない。

我々の先輩が汎美を立ち上げた時代、自由な表現ができず、画材も配給という、そんな時とは比べようのないくらい、たかが知れた難局なのだろう。

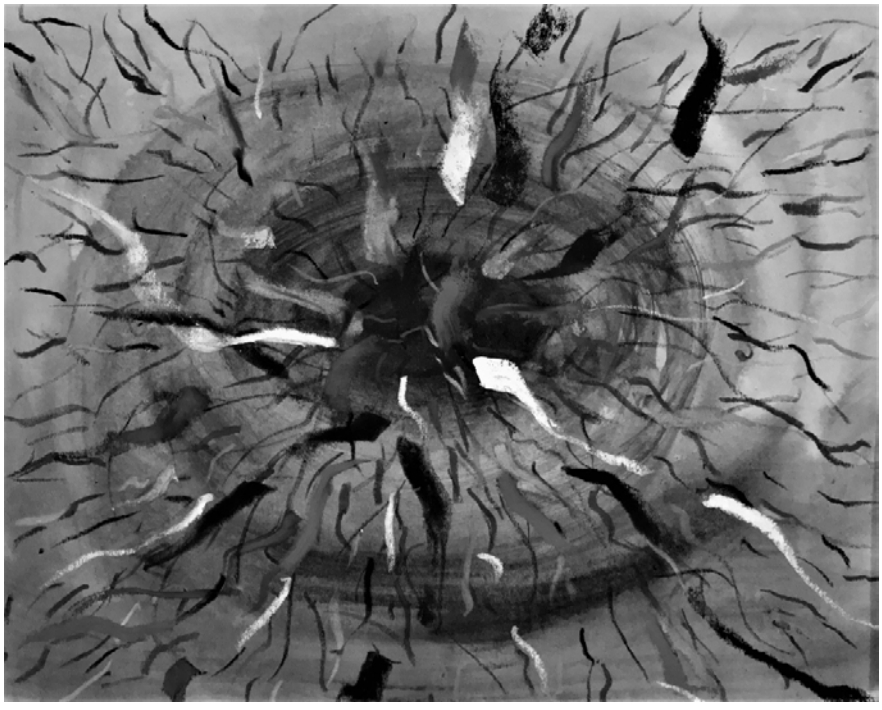
様々な事柄に心を揺さぶられながら、私も絵を描いてきたし、これからも描いていくのだろう。

しかし、発表の場は？美術に関する活動は？

発表の場は社会と繋がる大切なコミュニケーションの場だ。コロナ禍での問題もあり、表現の自由の問題もある。

嘗て、時の政治権力に利用されたメディア、学術や美術にもその手が及んだ。意に反してかどうかは別として戦争に協力をした人たちもいた。今、その当時に似た状況になってきていると識者は言う。そういう中で、政治権力からの思惑をはねのけて、創造・表現の自由、満足できる表現の場をどう作っていくか。これからの美術活動の重い課題だ。さらに終息する目途が立たないコロナ禍。

最近、大きなホールでライブが行われだし、無観客だったスポーツイベントも客を入れている。展覧会は予約制で入場者数を制限し、密を避ける工夫をし、開催している。我々もどうすれば開催できるか。密を避ける入場制限とソーシャルディスタンスを確保し、接触を避けるなどなどと消毒。市中感染が拡がり、まさにパンデミック、リスクはある中で、活動していくことになるのだろう。



「魂に飛び込む光たち No.100」[*2]

しかし、運動不足は足腰を弱体化させる。寝たきりになるリスクがある。動ける体力を維持するためには、適度な運動は欠かせない。汎美の一年は運動不足、結果的に活動停止したための足腰への影響が気になるところだ。

2020年12月、4人でグループ展「現在。そして、これから……展」を開催した。

Now. And from now on……, exhibit.

自然災害やコロナ渦、不透明な政治、あらゆる面で混沌とした状況に思える現在、
そして、未来への夢や希望が抱きづらい……。
手に負えない日々が過ぎていく。一年の終わりに、少しばかりの抵抗を……！
明日へのエネルギーに！

（案内はがきより）

発表の場、可能性の追求を！

2021汎美展では、WEB汎美展を開催したいと考えています。作家のテクストをQRコードから読めるようにしたい。講演会や講評をYouTubeで流す。WEBに掲載する。

このところ、汎美もZoom会議を開催しているが、非接触コミュニケーションを取り入れていく流れだ。

スポーツクラブは窓を開け、送風機を回し、換気をしている。寒い。路線バスも窓を開け換気している。壁のない、風が通り抜ける解放空間？
……？ ……？ ……？ 美術界が変貌する契機になるのだろうか？ （終）

＊1,2は、2019年10月頃から始めた100枚のドローイングです。
No.100は、2020年12月7日に描いたものです。グループ展（小杉和美、中村加代、青染レイコ、中西祥司）にはその中から新しいものを中心に50点展示しました。

新型コロナウイルスに思う

再生アーティスト　いなずみ くみこ

私達が住む地球の環境破壊が話題になって久しい。私たち人間の欲望のままの活動により森林は減少し、大気は汚染され、気温は上がり、水も土も汚れ、異常気象により多くの災害が起こるようになってきた。私たち人類がこれからもこの地球上で生き永らえるためには、今の自分たちの生き様を考えなくてはならない時に来ているのではないか、と私は思い続けてきた。でも、今はまだ大丈夫だと多くの人は思っている。明日も同じ日々が平和に続くと思っている。今はもう、崖っぷちに立っているのかもしれないのに。

それを多くの人に伝える術がない。どうやって気づいてもらえば良いのだろう。それが私の考えてきたことで、そのために廃棄物で作品を作り始めたのかもしれない。地球の資源は枯渇しつつある。永遠にある訳ではない。今あるものを大事にして生きていこう。そういうメッセージを送るために。

そんな時に、新型コロナウイルスが現われた。日々、増えていく感染者の数。感染して亡くなられた方や、感染して苦しんでおられる方の存在には胸が痛むし、医療従事者の皆様の献身的な活動には頭が下がり感謝しかない。

私たちは眼に見えないウイルスの感染におびえて「死」の恐怖を身近に感じるようになった。感染を恐れて日常は変化を余儀なくされ、今までの生活を見直さざるをえなくなった。夜の飲食がなくなった夜は、気温が下がり熱帯夜が減った。青空は澄み渡り、今までにない美しさを見せた。私たちが活動を少しひかえただけで、このように自然は復活することを知った。

プラスティックごみで汚染される石垣島の浜

私は宗教者ではないけれど、世界規模の「神の啓示」を受けたと思った。私たちの生活を人類全員で見直す機会が与えられたのだ。ここで見直すことができたのなら、私たちはまだこの地球上で生きていくことができるのだと思いたい。

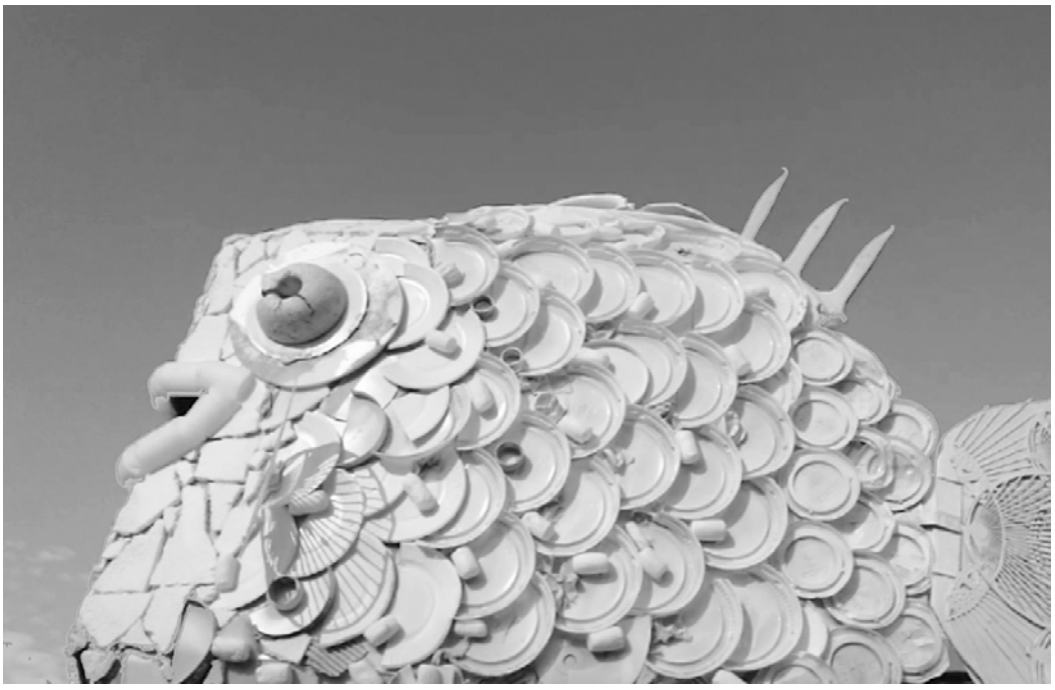
明日に同じ日は来ない、ということを多くの人が体感した。健康で平凡な毎日を送れることが、どんなに幸せな事かを感じたことだろう。

私たちは、この新型コロナウイルスの騒動から、多くのことを学ばなくてはならない。この日々を忘れてはいけない。今までとは違う生き方を考えよう。

私は脱プラスチック生活を始めた。レジ袋はもらわない。水筒とスプーンと箸は持参。プラスチックの容器に入っている物はできるだけ買わない。ラップを使わず、流しのスポンジを棕櫚の束子とへちまに置き換えるのが今の目標だ。

そんな生活の中で、私はこの世界の果てで暮らす架空の魚の着ぐるみ「果て」を廃棄物で作った。「果て」は金魚鉢の中で泳ぐペットの金魚のように、飼い主が水を変えてくれなくては死んでしまう儚い命である。今回のコロナの感染騒動で、人の活動が押さえられたことで「果て」の住む世界は少し広がり、少しだけ美しくなった。「果て」が世界の果てで生き続けられるかどうかは、私たちのこれからの生き方にかかっている。「果て」の世界を守って欲しい。そんな物語を考えながら。

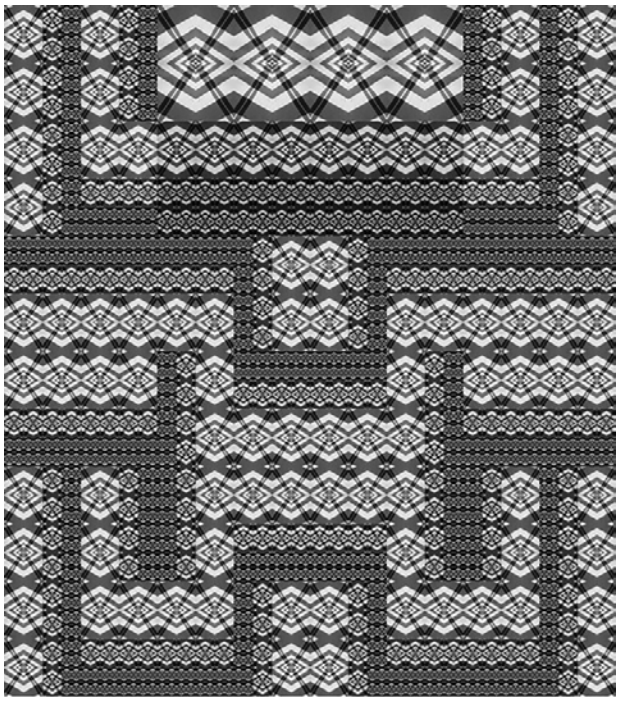
「果て」の存在が、そんな夢物語のアイコンになればと思って、私は「果て」を着て、コロナ禍の展示会場を泳ぐ。狭い「果て」中にいて、外界はほとんど見えず、汗だくになっても、夢物語を紡いでいる幸せを心から感じることだろう。「果て」は不思議な笑みをたたえながら、私たち地球の飼い主を静かに見守ってくれている。



廃棄物で出来ている着ぐるみの魚「果て」

コロナ渦の中での私のアート作品

なごみデザイン研究所　岩橋 格



コロナ渦の状況下、日常生活でCOVID-19とどのように共存するのかを模索している毎日です。「迷路」という言葉が浮かんできたのは、5月に予定された個展を延期することが決定的となった4月初めでした。人物画像を幾何学的に変化させながら、縦横に移動させて、色彩にも濃淡を加えたところ、迷路のイメージが偶然できました。A4サイズに印刷した作品と、KGサイズ12枚で作る作品の2サイズを壁面アート作品として展開しました。「迷路」に登場するのは、昨年の5月に横浜みなとみらいギャラリーの会場でヒトマンダラ作品の作製にご協力頂いた約100人の来場者全員と、昨年6月に、スペイン・サラマンカの世界遺産「貝の家」のギャラリーでご協力頂いた800人の来場者の一部の人達です。作品の中に登場する人物画像は、従来から展開してきた小さな人物画像をそのまま使用して「迷路」作品としたものと、従来の人物画像より大きい画像を使って「迷路」作品とした2種類です。人物画像の小さな作品は、いわば「三密の状態に人物画像が置かれています。逆に初めの「三密状態」の「迷路」に使われた人物画像を大きくして、ヒトとヒトとの間の距離を大きくした作品は、ソーシャル・ディスタンスを保つように表現した作品と言えます。コロナ渦の日常生活をきっかけに「迷路」作品をさらに展開してゆきたいと思っています。2021年3月の汎美展では、大型の「迷路」作品を発表する予定です。添付の「迷路」作品は、横断歩道に自分の影を投じて撮影した写真を、「迷路」に仕立てた作品です。 影を大きくした作品と小さくした作品を並べてみました。

（令和2年12月）

新しい感性と世界観の往還

久保 進

《日記から三話》

① 3/4

「コロナ感染拡大により閉館中の美術館に打合せのことで連絡する。電話に出た担当者の話す声は暗く覇気がない。こちらの元気を吸い取るような気配である。美術館は作品を通して過去、現在、未来を見晴らす窓である。担当者が落ち込んでいる場合ではない、元気を出せと言いたくなる。」

② 3/16

「欧米でも感染拡大が止まらず、世界経済も急速に冷え込んできている。いつ収束するのか見えない不安。過去にもペストやスペイン風邪を経験してきた人類。100年に1回あるかないかの危機である。一日一日、心して生きていこう。」

③ 4/9

「緊急事態宣言が出てから2日目。ゴミを出し、食料品の買い出しにスーパーに行く。店の混み具合によっては帰ろうと思っていたが、客は比較的少なく、必要なものを次々にかごに入れ15分ほどで買い物を終える。急いで“巣”に帰る。」

コロナによって日々刻刻と日常生活が奪われていく様子、自分の動揺がこの頃の日記でよくわかる。

自粛生活が長引く中、如何に不要なモノに囲まれて暮らしているのかが見えてきた。

普段の楽しみや生活道具についても否が応でも向き合うことになり、考えてしまう。自分の気に入った空間の少なさにも驚かされる。感染防止のための三密回避は、人々との交流、音楽ライブ、アート鑑賞などから私たちを遠ざけたが、逆にそうした“日常”の重要性を再認識することにもなった。コロナ時代、コロナ後を人間らしく生きていくにはどうしたらいいのかと考える人たちは少なくない。これは、世界で同時に起きている人々の共通の内観だと思う。故に、コロナが明けた時、間違いなく人々や世界の様態は変化するはずだ。

例えば、私の作るオートマタ（からくり）でさえ構造の変更を考えている。今までは、手でハンドルをまわして動かす手動式だったが、今後は電動でも駆動出来るようにするつもりだ。もちろん、手で動かす方が良いに決まっている。なぜなら、物理現象の面白さや不思議は、手を含め五感を通して体感出来るのだから。この変更は感染防止を優先するコロナ禍では仕方がないが、もう一方ではコロナが新しい発想を生むきっかけになることもある。巷では、感染防止のためのマスクはファッションの一部となり、飛沫防止のためア

クリルのパーテーションがアートとコラボするなど新たな商品や需要も生まれているのだ。働き方も含め、コロナ禍に負けないようあらゆる業界で努力が続いている。当然、生活や社会の様態も変化していくことになる。

しかし、人々が求めるのは“モノ”ではない。コロナから解放された人々が求めるのは“モノ豊かさ”ではなく“精神的に充実した世界”だ。日常生活の中にも潤いのある豊かな空間を求める傾向が強くなるだろう。また、科学技術や経済を優先してきた多くの国々や人々が、コロナの経験によって環境問題や世界の文化や芸術に関心を持つようになると思う。というか…、思いたい。そうなれば、アートは人々の日常生活に必要な領域として、今まで以上に確固たる位置を占めることになるだろう。

海外旅行が安全に自由にできるようになるのは2年〜5年かかる？という話もあるが…。私たちは世界中の人たちと今までにない新しい「感性、世界観の往還」を通して“アートの楽しさ”や“生きる喜び”を分かち合いたいものである。

自粛という引き分け

成田 雄智

コロナ禍の最中、大なり小なり影響ならあった人達はいるだろう。私の場合、作品に直接マイナスの影響を与えたかと言われれば、別段無い。むしろ、こんな時だからこそ芸術というものは映えるものなのだと、感じた年だった。

淡路島での約4m×4mの大きな油絵の依頼や、ライブドローイングの依頼。ライブ配信への挑戦。鍛治師の友達と鉄板に向けて油絵ライブペインティング。さらにその鉄板ライブペインティングの風景を映像撮影、編集してもらった動画とのコラボ展示への野望。

自粛期間中は、それよりも前は金が無いにも関わらず自身の身を削って無理をした活動をしていたのだと痛感した。溜まっていた依頼をこなし、自分の無理の無い範囲というものを知れた。

外出自粛期間は弓の引き分けに似ている。身体を整え矢を放つまでの準備期間。耐えれば耐えるほど、伸びは長く放たれる。私の作品は転ぶほど強く立ち上がるのだ。故に今がある。相変わらず金は無いが、私の心は贅沢だ。

コロナ禍の下に思う

小杉 春見

毎日この異常なコロナ渦の中、このままこれが日常になっていくのかもしれませんが、あまり振り回されず正しく付き合っていきたいと思います。

3月以降、色々な発表の場がキャンセルになったのもあり、作品制作はできていません。

それに4月から1歳半の孫の子守が私の仕事になり、何もできない状態です。

でも孫の成長の貴重なひと時に参加できるのも楽しく幸せな時間なので、全力で向き合っています。

しかし来年度は色々な団体が発表の場を持ち始めたので、そろそろ重い腰を上げて作品制作に取り組まなければいけませんね。

地方に暮らす者にとって汎美展は夢を現実に変えてくれるユートピアです。

東京都美術館や新国立美術館に展示されるなんて考えられないことでした。

しかし長い長い歴史がありアンデパンダン展で審査しない、表彰もしない、展示位置は抽選！！！

なんと崇高な考え方でしょうか！！！

心から敬意を表します。

天下の日展でさえ知人が「もう何年出しても賞も貰えないし出品するのをやめようと思う」と審査員に漏らした所、翌年は入賞したとか。

そう言う裏話を聞くと私は汎美術協会を誇りに思います。

役員の方達は大変なご苦労をなさって会を支えてくださっていますが、私達は地方在住ゆえと甘えさせてもらっています事どうぞお許しください。

心から感謝しています！

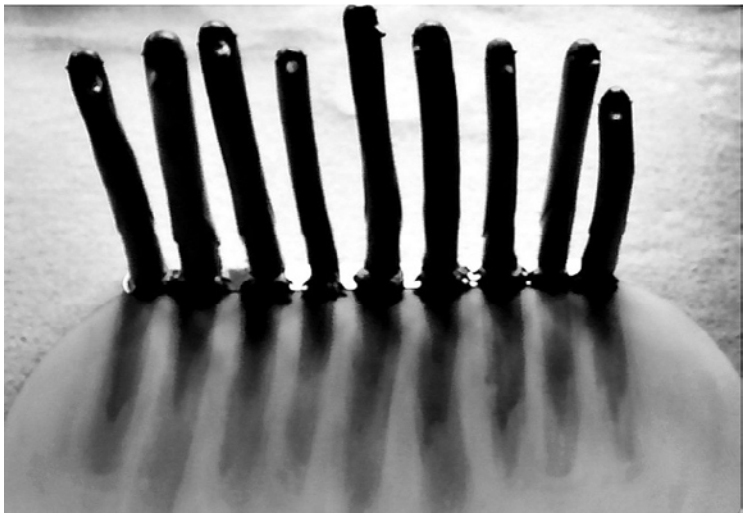
これからもどうぞよろしくお願い致します。

私の考えるアートは

三竹 康子

問われているアート！とは何？ 私の考えるアートは､爆発ではなく自分の生活の場、社会、その中で沸き立つ感情を見つめて形を探し、色彩を探すこと。考え思いの詰めの浅さは自覚していて、より深く遠くに行きたいと深呼吸するが、進めないのが現状です。その生活日常にふって沸いた「新型コロナウイルス」。「ふって沸いた」は当たらないと思うのです。共生であるべきこの星に「我がもの顔」してのさばり、のさばってきた人類の傲慢がもたらしたと思えて仕方ない。受け入れて、やり過ごすしかないのだろう。やり過ごせることだろうか。やり過ごせたなら幸い。「人が間引かれている」と言う人もいて、頭を垂れる思いもして、共感するところもあるのだ。やり過ごしながら共存する方法は、どんな形と色か？ 新しい価値観と基準をもたらしてくるのだろうか。正しい判断ができるだろうか。

絵という表現は、見たことのない価値観を表すだろうか。破滅に向かう道を辿るだろうか。



「ニョロニョロ」

作品のことをより強く意識

丹羽 千賀子

電車に乗ることを控え、車と徒歩のみの移動という生活になってから、ずいぶん長くなる。展覧会に行くこともほとんどなくなった。医師からの忠告があったとはいえ、以前の私からすれば考えられないことだ。ただ自分でも不思議なことに、新型コロナに罹患するかもしれないという不安は高まっているものの、この小さなエリアでの生活に馴染みスト

レスをあまり感じていない。目の前の空で毎夕繰り広げられる鳥たちの攻防、思わぬ所で出会う植物、散歩の途中で見つけた打ち捨てられた祠などなど、今まで気が付かなかったささやかな刺激にワクワクしたりもする。案外に単調な日々が好きなのかもしれない。

とは言いながら、頭の片隅で慣れきってもヤバイぞ、老化が進んでる証拠かもしれないと、アラームが鳴っているような気もしている。

アートの定義はよくわからないが、絵具や紙やキャンバスを使ってささやかに自分を確認し、発見し、変化を意識することは私にとって人生の終盤の大切な支えである。

「新型コロナ禍」の真っ只中、自分のこと作品のことをより強く意識してしまう。いったい私は何を、どう表現したいのだろう。改めて考えようと思う。

コロナ禍に思う

吉澤 浄子

2020年 新年の幕開け、毎年3日に前年中に練っていた構想をキャンバスに下塗りする事にしている。

新しい年は汎美展も、ベルギーでの初海外展も、私はフランス片田舎でのスケッチ旅行が始まる予定だった。

よもや、このような一年が始まろうとは、誰もが考えられなかっただろう。

考えようによっては私の人生で初めて貰ったご褒美のような時間、家の中で24時間を自由に使って良いなんて！毎日追われていたなあ、今の内にコレを、次はアレを、と。

出来た時間が嬉しくて沢山有る古キャンに下塗りし、下塗りに塗り残した色に命を吹き込んだりして何枚描いただろう。

しかし、ふらっと立ち寄る美術館歩き、気になる作者の個展巡り、絵のサークルの活動などすべてが出来なくなった。すると私の脳も活動停止、ヒラメキが沸かず制作意欲も沸かず、自分にとって絵を描く、とは何だったんだろう、絵三昧の日が欲しいと思っていた筈なのに絵筆を取らない日が続いても何らストレスにならない。

ウォーキングの道すがら紅葉した落ち葉を拾って絵の具を塗りハガキに押し、友に出した。松ぼっくりを拾って銀色や緑、赤、黄色など塗ってクリスマス気分を楽しんだ。

今思う、私にとって絵は心の旅路なのかもと、どこまでも限りなく続いて欲しい心の旅路を大切にはぐくんで行こう。

テレワークとリモートと陶芸窯とYouTubeと私

関根 昌之

私は東京の上石神井駅のそばにある、とある小さな（本社はさいたま市にあってそれなりに大きい）アニメーションの制作会社に勤めてます。

コロナのニュースが世間で流れ出した2020年3月頃、上司と相談しまして『テレワーク』という当時はまだ耳慣れない仕事様式、自宅のパソコンの液晶タブレットでキャラクターデザイン、プロップデザイン、美術設定デザイン、画面設定、SkypeやZoomでの作画打ち合わせなど、人と会わないでアニメーションを作るという昔では考えられないような、新しい生活が始まりました。でも言ってしまえば、絵を描いているだけなので、すんなりこの生活にも上手く馴染んで、今まで２時間半もかけて通勤してるのが「もしかして時間が増えたのでは？」とうっかり勘違いした6月頃。「あっ、そうだ陶芸家を目指してたんだ。」と、「陶芸窯を購入しよう。」

という事で、10年ぶりに小さな、とても小さな、電気陶芸窯を手に入れました。「あっそうだ。焼き物を作っているところを映像に残そう」という事で、「YouTubeもやってみよう。」って感じで「陶芸制作工程動画とついでにアクリル風景画の描いているところを、タイムラプスで描いているところを観てもらおう。」って今じゃ仕事陶芸タイムラプスと、毎日がなんだか分からなくなってしまいました。

『ネキセユキ』という名前で（会社には内緒で）、YouTubeやってます。非公開から公開にしたばかりなので、まだ誰も観ていません。いつか観てください～

趣味絵師風情

描き主　矢作 拓也

描き主が、日常の変異を肌で感じたのは、昨年春の汎美展の中止だった。
同じ頃に仕事でも変異は起こるが、幸いに生活を維持できる程に順応でき、瓦解を免れ今日に至っている。
一年ぶりの汎美展再開を目指す現在。
未だに収束の兆しも遠いコロナ禍の中、アートはどうあるべきかと問われて…。
浮かんだのは、“諦観”だった。

“本質を明らかに見て取ること”　という意味がある。
では、その“本質”とは何か？
混沌としたコロナ禍の世界に必要なもの。アートが今できること。
それは、“平常”と“慰撫”だと思う。
世界は今、不安と恐怖からくる負の感情に苛まれている。
それに創作者は、感情的に相対するのでなく、むしろ少し冷めてるぐらいの心を保つべきと考える。
憂き世の現状を、感情的に塗り散らすのでなく、冷静な視点と感性、時に皮肉と風刺を込めて描く。
負の感情に苛まれ沈んだ心を鼓舞する娯楽とは異なり、本来の心の置き場を示すことが芸術の力ではないだろうか。
世界が乱れた時、いの一番で潰えるのは、芸術と娯楽だろう。
大袈裟でもなく、芸術と娯楽の停滞は平和の終焉に繋がると描き主は思い、それに対する恐怖もある。
時には、それを望むかのような的外れな扇動と流布を行い、不安と混乱を助長する者も現れる。
だから尚の事、創作者は変に気負うことなく、さもいつも通りに芸術を人々の身近に添え続けるのだ。

芸術がいつも通り、そこにある。
それが、誰かの不安をほぐす(慰撫する)ことに繋がると信じて。
仕事としてでなく、あくまで趣味として筆を持つお気楽者の理想論と言われればそれまでだが、その考えに至った“趣味絵師風情”の描き主は、前よりも少し高い使命感と感染への警戒心を持ちながら、相変わらず仕事の合間に創作を続けているのである。

再発見　コロナ禍の美術館にて

花島 平

展示会の延期で、小学校の夏休みの宿題以来、締め切りが近くならないとと作業し始めない癖にて怠惰な日々が続いてしまいました。（反省ばかりです。ハナシマ タイダ？）

先日4Kテレビ用4Kチューナーが一年前の半額になっているのを発見し購入、老眼鏡をかけ40センチの至近距離にてしかその詳細画面を認識出来ないのが辛いところですが、NHKのルーブル美術館特集などを楽しんでいます。多分現地で見ても解らないような、モナリザの拡大画面でひび割れの詳細な画面など、映像技術の進化を楽しんでいます。

家電量販店での新しい大きなテレビや、まだ見ていないですが8Kテレビ等での詳細画面でのリアルさはきっと驚きではないかと思います。一方、コロナ禍で外出する機会が減って美術館に出かけることも少なくなっているこの頃ですが、10月の始めに多摩美術大学美術館にて『須藤一郎と世界一小さい美術館ものがたり展』を見てきました。

須藤一郎氏の最初のコレクションである「管創吉《壺中》」の現物を見た後、結構詳細な印刷写真ですがカタログに目を落とすと、すごく薄っぺらに感じたことを覚えています。

やはり現物から受ける微妙な立体感を感じる作品の印象は、違います。美術鑑賞は、コロナ禍のいま、人との接触を極力避けながらですが、出来るだけ現物に接してみたいものですね。

菅 創吉「壺中」

新型コロナ禍の中、私

敷地 和子

突然の春の汎美展が中止。今まで当たり前だったことができなくなり、なんと不自由で残念な年だったのだろう。

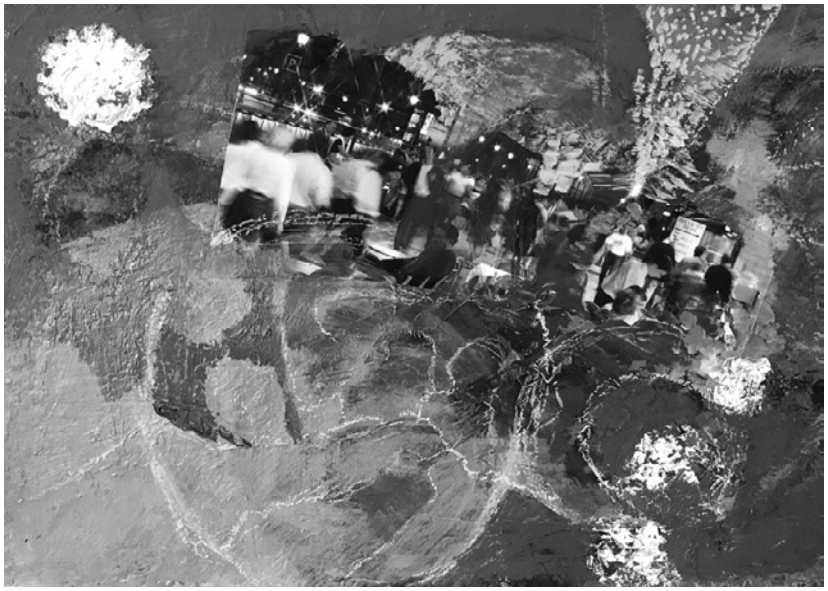
本来ならば会期中、すぐに私は出品予定していたものを仕切り直した。キャンバスをひっくり返して眺めたり、削ったりと、「作品よ、何とか言ってよと・・・。」向き合う日々。（未だ制作中）また小作品で遊んだ。「きっと人はこの試練を乗り越える!!」時期が来れば終息すると思ってきましたが、想像以上に新型コロナは手ごわく、今は不安である。

この間、無性に人の群れや自然の変わらぬもののエネルギーを描きたくなった。朝のウォーキングがきっかけ、シロツメクサの花が次々に咲いていた。我が家の小さな花壇にハラン（植物）がつぼみをもちツンツンと出てきた。自然の小さな目覚めエネルギーや、それらを描きたくて、F4のキャンバスで遊んでみた。小品制作は楽しい。

ここ何年間、発表する場があるから描くといった感じで描いてきました。

しめきりがあるから、とにかく作品（結果）を出す。描きたいものが見つからずしんどい。描くことはしんどいし、孤独。色は濁り、決定的な形や色をおけない・・・・自信喪失・・。社会生活のかかわりの中から、描きたいから描くでありたい（当たり前）。こんなことを言ってはいけなく、不謹慎だが、立ち止まる時間もムダではなくありがたい感もあった。

しばらく何年かは新型コロナが収まったとしても、経済に悪影響は残るだろう。アート/芸術の世界も厳しいと思う。国は芸術や文化を支えて欲しい。守って欲しいと強く思う。私達は人が足を運んでくれる展覧会をつくらなければいけない。なまぬるい作品をつくってはいけない。一人一人の心意気を出す展覧会に!!　と自分を叱咤し制作している私です。



ピュシスとしての自然

島田 隆一

新型コロナの直接的な原因は中国の食性動物市場からコウモリ等を介して感染が広まったと言われているが、本来の原因は、森林伐採・開発等による動物との距離が近くなったことやCO_2排出による温暖化・気候変動等が関係していることは明白であろう。

「人新世」と称される程、人間の力が大きくなり、人間中心主義が地球全体の負荷を高め人類の生存を賭けなくてはならないところまで来てしまった。しかも、ここまで18世紀の産業革命から250年位しか経っていない。近代思想の基になっているデカルトによって唱えられた“我思う、故に我あり”は「近代科学」を生んだが、一方で人間の存在自体を意識的存在に矮小化したことによって、今となれば、上にあげた問題を孕むものでもあった。

昨年6月の新聞紙上で生物学者の福岡伸一氏が、我々の最も近くにある自然として自分の身体をあげ、それを「ピュシスとしての自然」（これは我々が普通“自然”と言って思い浮かべる本来の自然のこと。人間がコントロールできない。）とし、それと対立する“自然”として「ロゴス＜論理・言葉＞としての自然」（ギリシャの昔から、人間の頭のなかで考えられてきた自然。キリスト教等の宗教も含まれるだろう。）をあげ、今回のコロナ禍を通して、我々が「ピュシスとしての自然」の中に存在していることに気付かされる旨を述べている。この自然観は、新皮質（前頭葉）を持ちそれを肥大化させたホモサピエンスとしての人間を指し示す一方で、旧皮質を動物と共有している動物としての人間にも対応しているのではないだろうか。

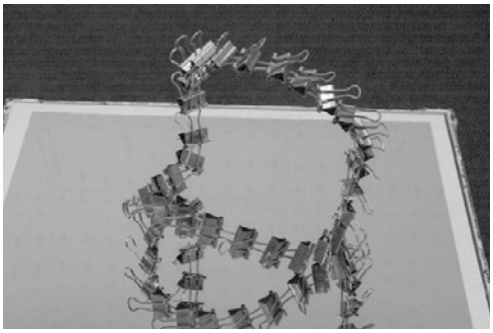
昨年の夏、現代美術館でオラファー・エリアソンの「ときに川は橋になる展」を観た。＜クリティカルゾーンの記憶＞という作品は、作品がドイツ－ポーランド－ロシア－中国－日本と輸送されて来たが、二酸化炭素を多く排出するヒコーキをさけ、鉄道と船で搬入されたそうだ。

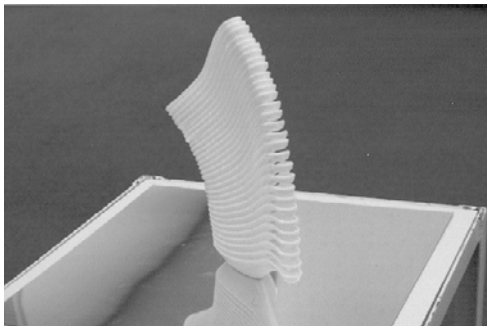
作品を収納した木箱に取り付けられた振動記憶装置によって、輸送途中の振動がドローイングとして記憶されるという仕掛けだった。人間が手で描いた線と違って極めて極細の糸をクニャ～と垂らしたような線だった。魅力的ではあったが、これはエリアソンが描いたものなのか、振動記憶装置が描いたものなのか、ここからアートとAIの協働も視野に入って来るのではないかと思った。

AIと共生する社会はロボットと共生する社会であり、表現の世界では「鉄腕アトム」の昔から、最近では「ロボサピエンス」までアニメの作品等では数多くある。というよりすでに現実の問題なのだ。一方で動物としての人間はどうであろうか。我々が子どもの時に見た動物園を、今は同じ目で見られないように動物観も変化している。この分野でも、我が国では、「鳥獣戯画」、「若冲の絵」、「アイヌの神話」等、数多くの作品が存在する。

類を同じくする仲間として、新たな目線で動物と共生する社会が意識化されてくるのではないだろうか。動物が生きられない社会は又、人間も生きられないのだ。

14世紀ヨーロッパでのペストのパンデミックが、15・6世紀ルネッサンスを用意したというような大きな変化には繋がらないだろうが、今回の新型コロナのパンデミックによって「AI・デジタル社会」との共生、「ピュシスとしての自然」との共生の重要性が、今より、明確な輪郭をもって、顕在化して来るのではないだろうか。その時、アートも何らかの形で、それらを取り込んだものにシフトしていくのではないか。





「事の起こり」

雑 感

馬場 温子

自粛、家にこもって最低限の生活を維持していればそこそこ日々が過ぎていく。家事にもそれなりに時間がかかり、そんな過ごし方も楽(らく)でコロナを隠れ蓑に怠惰な生活を楽しんでいる自分がいる。こんな時こそと多少は絵筆もとってはみたが・・・

ほとんど電車に乗ることもなく、春展が中止になり秋展も中止になり、そしてテレビを見る時間が増えた。感染者数がいつも気になり、コロナ・コロナとコロナに振り回されてきたようで、実はテレビやマスコミに振り回されてきたような気もする。確かに、新しい暮らし方のアイデアやユニークな情報は役に立つし楽しい。

ZoomやYouTubeの利用もずいぶん増えたが「やはり、リアルの方が・・・」という思いも強い。オンラインでの仕事はすごいと思うし分野によっては良いのかもしれないが、アートでオンラインは違う気がする。特に絵画や造形はやはり実物だろう。

汎美について思う。作品に関して考えると、自然から・人間から・社会から刺激や感動を受けて、それを私なりに作品にしてきた。しかし、展示の機会がないと制作意欲がわかないのが私の現実。発表の場がないと途端に制作意欲が無くなる。発表の場があってこその創作なのか？　改めて、人は人とのつながりの中で生きているし、表現もしているのだと実感する。何故、描くのか？ 何を描くのか？ どう描くのか？ 常に私の課題であるが、こんなところに行き着いていいのだろうか？

新型コロナってなんだ

小川 猛志

アート（芸術）は、その時代と人々の生活感覚の中から生れてくるものだ。

コロナが世界的に感染を広げている現状を作家としてしっかりと受け止め、その中での表現を考えなければならない。さて、コロナ感染と人間の存在をどのように捉え、どのような表現ができるのかと思いを巡らすとき、「新型コロナってなんだ。」そもそも新型コロナはどこから出てきたのだろうかと考えた。

この新型コロナなるものは、人間が作ったものが漏れ出してきたものだという噂もある。もしそれが本当であるのなら人間の歴史を其の終焉から見ていかなければならない。即ちあれだけ隆盛を誇った恐竜族が隕石一つで滅んでしまったように、地球上の生物の中で最も知能が高いと威張っている人間たちも自らが作ったもので滅んでいくことになる。

日本から世界に発信し凄い人気になっているアニメ映画は「風の谷のナウシカ」等、もう何年も前からそれを予感し表現している。映画でもSFの分野で「猿の惑星」など、もう古典の域に入っている。美術の世界ではどうだろうか。丸木夫妻の「原爆の図」を思い出す。でもまだまだ少ない。政治的な立場を離れ、人間の狂気を喚起することを作品のコンセプトにしなければならない。これらを考えさせられるいい機会でもある。

私は以前、「Eats His Own Flesh」（2008年）という作品（左図参照）を作ったことがある。

あの当時も農薬問題や地球温暖化など、人間たちが今の自分だけのことを考えて環境を汚し、自ら生きられなくしている状況を見て作ったものだ。

コロナはどんな作品になるのか。まずはデッサンから始めることにしよう。

（2021年2月28日）

第57回創型展
「Eats His own Flesh」

アートの中に自分を見つける

岩田 洋子

「言葉は心を超えない♪」という歌詞があるが、メロディーに乗るとその切なさは多くの人に伝わる。選ばれた数少ない言葉と音楽で感動を与えたり、文学のように、言葉を尽くして人生の指針となったりするものもある。こうして人が生み出してきた様々な表現の中で、アートもまた大きな力で歴史を作っていると思う。自分自身や社会に対する思いを自由に表現できること、または心の琴線に触れるそれらに出合うことができたら、少しは辛い時を耐えられるのではないだろうか。

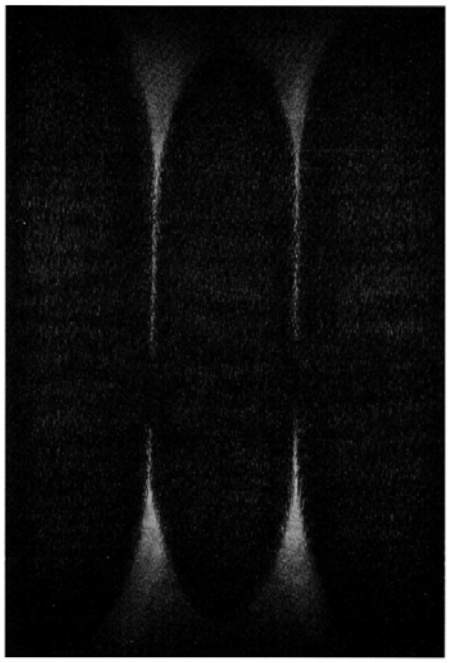
私は好きなアート作品に出合うと、日常がすっかり取り払われ、頭の中は澄み切った空気に満たされる。感動しながらも、『どれだけの時間をかけたのだろう？』、『なんでこうなるのだろう？』とか、哲学のようなタイトルに悩んだりしては自分の想像力の無さに落ち込むのだが、見つめていると次第に勇気が湧いてくる。

汎美のこの一年は厳しいものだったが、私にとっても、人生のワースト3には入る位の苦しい日が続いている。ついつい後ろを振り返ってしまうような中、大好きな舟越桂展に行くことができた。静謐な瞳に心癒されていると、会場ではインタビューされている録画が流れていた。舟越氏は、スフィンクスシリーズを創って、「自分はこのために彫刻をやっていたのだと思った」とにこやかに語っていた。そして、今回、氏の書き留めるたくさんのメモを見るのも目的だったが、【新しいものは自分の中に見つける】と書かれたものがあった。そうか！あの遠くを見つめるような瞳は、自分の無限の可能性をどこまでも追及する、という永遠の眼差しだったのだと感じた。

私の汎美はまだ始まったばかり、もっともっとたくさんの実験が必要だ。せっかく汎美から与えられた自由な精神なのだから、たとえ迷いながらでも、これが私と言えるようになるまで、それが何かを探して行きたい。

コロナの年 個展までの日々 ―日記から―

廣瀬 万喜子



そうまでして描き続けることの意味、個展で発表することの意味はあるのだろうか。3月、コロナ肺炎の感染は拡大していた。

3月22日・・・今回のコロナウイルスのパンデミックには、底知れない恐ろしさを感じる。自然が何らかの意志をもって、人間に警告を発している。自然を征服したつもりになって、甘くみてはいけない。人間はもはやこの地球にとって害をもたらすもの。いない方が良いものなのだ。

3月～6月、デイサービスをお休みした母との巣ごもり生活に入った。個展は、2年前から画廊と契約していたのだが、キャンセルできるだろうか、延期できないだろうか、画廊にいつ電話をしようかと迷う毎日だった。

4月18日・・・「淡々とやるべきことをするだけです。」とウイルス研究者は言った。恐怖にパニックになっている人々に、自ら盾のようにあろうとしているその人の意志を感じた。「落ちつけ」と思った。今おかれている状況に妙に現実感が無く、ふと我に返って恐ろしさに震え上がる。そんな私に、「落ちつけ」と言われているように思った。

6月1日・・・「腹をくくる」。以前の日常はもう戻らないだろう。新しい生活のあり方。淡々とやるべきことをやり、やりたいことを後回しに考えるのではなく、少しずつでも今、実現していくこと。

何回かの画廊とのやりとりで、10月に予定していた個展を12月に延期してもらった。画廊からはっぱをかけられたのもあるが、母との巣ごもり生活…私を姉と思ったり、友人と思ったり、不安でいっぱいの小さな子供になったり、めまぐるしく移り変わる母とのふたりだけの巣ごもり生活に正直、限界を感じていたこともある。母にはデイサービスを再開してもらい、制作も再開した。無理をせず、できる範囲でやればいいと思った。淡々と、完璧を求めることはない。

9月16日・・・「イタリアの小さな村」というテレビの番組がある。小さな村の普通の人々の、幸せをかみしめるような日常の小さな物語。美しい景色と、素朴な人々の宝石のような言葉。

暗く恐ろしいニュースを母には見せないために、テレビ番組はこういうものばかりを選ん

で見ていた。他にも、「駅ピアノ・空港ピアノ」、「地球タクシー」など。無名の、しかしひとつひとつが深い味わいのある小さな物語の数々。

9月21日・・・ひとつのタッチ、ひとつの色、それが無数に積み重なって、「たち現れるかたち」があり、「たち現れる色彩」が生まれる。そういう画のつくり方をしたいと思った。たち現れるものは、森、夜の庭、涙のしめり、会いたい想い、孤独な声、自然への畏れ。

個展までには結局、作品は3点、仕上げることしか出来なかった。でも、ひとつひとつ心をこめて描くことができたと思う。家の事情があり、搬入・搬出は画廊にお任せしてしまった。会場にもほとんど行けなかった。そんな私の個展を見に来てくださった方々に感謝しかない。本当にありがとうございました。

コロナ後の世界は、きっとすごく変化しているのだろう。以前より穏やかな世界になってほしいと思う。自然を尊び、自然の中にとけこむように、自然の一部としての自分の命を見つめていくような生き方ができたら良いなと思っている。

夜明け前

佐川 毅彦

私は今、沖縄で生活している。発表する作品はほとんどここで制作している。毎年県立博物美術館のギャラリーで絵画展をやっている。おかげでワケのわからん知りあいが、友だちがふえた。沖縄にはいろんな芸術家がゴロゴロころがっている。残念だが去年と今年は展覧会はやらん事にした。コロナで人を呼べない。友人、知人、ファンの方に絵を観に来てくれといえん。右か左の見物客の中には感染していて症状もなく本人も気づいてない。それが病人の私にきやすく話しかけ長話をしてコロナ菌をうつす危険がある。私など感染したらすぐ死んでしまう。私は生きたい、もっともっと絵を描きたい。まだ私はこれだという絵を描いていない。コロナが終息するまで汎美もお休みにしてほしい。

コロナのおかげでマスクをして、沖縄は外はまぶしいのでサングラスをする。スーパーで知り合いがいても知らんふりして買い物ができる。この齢で、こうなるとやる事はひとつ、アトリエにこもって、ひたすら絵を追い求めるだけ。実にもってこいの日々である。“やるぞー”と筆を両手にキャンバスに突撃だ。そして、日本の夜明けをまつのだ。ここで快傑ハリマオ―の歌を高々にのろしをあげて、輝ける明日をまつのだ。エイエイオーまたひとつ傑作ができた。やった、オレはまだやれる。オレは絵かきだ。玉砕だ！

コロナ禍のアートについての『茜モノローグ』

愚聴風　大辻 敏成

真に星霜は須臾のうち、早くも師走を迎えた。外部へ出かける恐怖感があり、どちらかと言えば自閉症ぎみ・対人恐怖症の私には、毎日が苦痛なく安らかである。視界には烏瓜の緋色が季節を示し、木の葉が舞っている。

外出自粛などのため、暫く茜に逢うことが出来ずにもの寂しい仲冬である。

ある日私は茜に次のような「ソネット擬き」を認めた書簡を送ったのである。彼女の返信はそのことには触れずに、標題の「コロナ禍でのアート」について『茜モノローグ』のデータが入っていた。ソネットについてさしたる言もないのが哀しく、寂寞たる思いである。

茜に送った「ソネット擬き」とは次のような拙作である。

「月冴へる宵に」

木枯らしに哭く寒林

あなたの愛をスライスした
の截り口のやうに
今宵の月は　皎く耀ふのです…
と　手紙にしたためてあなたへ送ったのは
木枯らしが櫟林の梢にいたり
哭く聲が聴かれた
月曜日の宵でした

あなたに　わたしの拙い言の葉を
展げてもらひたひから…
言葉に酔ふことが出来る　あなたに
あなたは詩人なのでした

（阿堵＝金銭）

通俗・凡庸は阿堵に酔ひ
藝術家は　表現に酔ひ
とりわけ　詩人は言葉に酔ふのです

さて、茜の返書『茜モノローグ』は、概ね次のような内容だった。
掻い摘まんでここに記してみよう。（前の挨拶や、私的な言辞省略）

『茜はアートという言葉がどうも苦手、茜のイメージする藝術とはかけ離れているわね。翻訳すれば確かに芸術なんですが、“芸術表現”とか唯“表現”と言ってもらいたいの。特に“アーティスト”なんて言われるとわたし抵抗だわ。まずそれを申し上げてと…、標題についてだけど、

○たとい発表の場が無くても、つまり展覧会などが中止されても表現行為を行うのが作家と思います。展覧会が出来なかったら創作しない…なんて有り得ないわ。そもそも芸術の、そう芸能ではなくてね、皆さんのイメージされている芸術表現は**「無償の行為」**なんですから。それとも償いを予定されているんですか？

○従ってコロナは関係ないでしょう。天才は、コトの如何に関わらず創作するんでしょ。だって、一般に受けないから描かない…なんてことないんでしょ。純粋に考えればね。そうは言うけど、このコロナと言ったら、文化は全滅ね。いいえ、このままじゃあ、人類壊滅かも…。

○ここで「天才」と言いましたけど、汎美の方で、いつだったか覚えていませんけど、次のようなこと言われたの茜、覚えているわ。

「私はすくなくとも私が天才ではないことは当然分かっているんです。
しかし、私が神であることについては敢えて否定はしないだろう」

と。このことについては、茜、宗教人や仏教人でもないし、「空（くう）」とか「唯識（ゆいしき）」とか、よくは分からない世界なんだけど、大乗仏教に「禅」というのがあって、その中で、「仏は己の裡（うち）に在る」といわれてんのよ。「他力」では無く「自力」の信仰ね。これにチョット似てると思ったわね。だからあんまり抵抗は感じなかったしそう思うわね、わたし。宗教と芸術って似てるとこあると思うんだけど、この話は危険、止めます。

○いろいろな考え方があっていいんだけど、またそうありたいけど、芸術創作や芸術表現ってそういうものだと、わたし茜は思っています。その人って語ることがチョット気障なのよね。でもね…その人ったら、早くシニア会員になりたいんですって…小声で茜の耳元で仰るの』

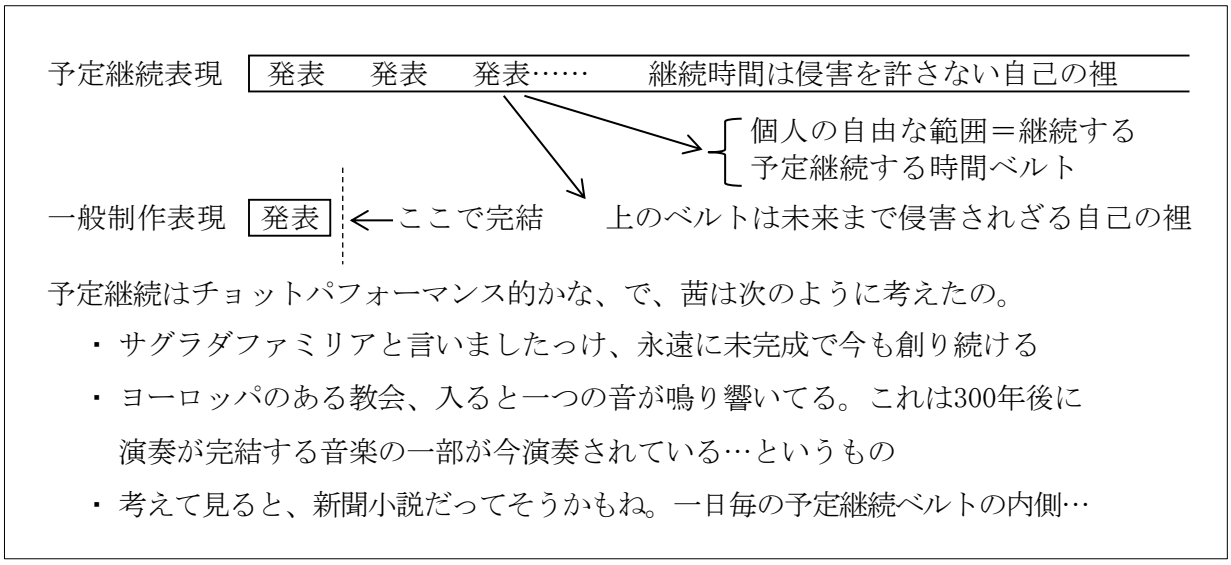
以上のような内容であるが、以上データに同封の書簡文末に一行だけ、「ソネットについては今度お会いしたときに…」とだけあった。私の、まるで中高生の歯が浮いてしまうような詩を、一行でスマートにかわすとは、さすがに見事な「中年をんな」の洒落を見たのであった。人類の危機であるコロナの終焉を切に願いたいものである。

（2020.12.5／四校）

§

この後、一ヶ月ほど経ってからだが、茜から次のような『音声データ』がとどいた。内容の概ねを書き記してみたい。

🔊『美術団体って、他の会ではよく会是みたいのがあって、例えば「写実を旨とする」とかね、汎美ではとんでもないことよね、そこが「汎美の自由」なんでしょ。だからコロナ緊急事態宣言下での汎美展、やるかどうか、きっともめたでしょうね。これって決めることは出来ないのよ、きっと…。道義（ヒューマニズム）上、反社会になる、一方は会場が開いてる限りやる…で、もし延期だと開催派の自由を侵害することになるし、開催だと延期派は自由を失う。確かに考えて見ればそうなのよね。私、よく分かりました。茜、ウッカリ気付かなかった。それはね、「やる派」の“**予定継続**”という考え方ね。下図のようにコンセプチュアルアートを含んでいるの。



予定継続はチョットパフォーマンス的かな、で、茜は次のように考えたの。

- サグラダファミリアと言いましたっけ、永遠に未完成で今も創り続ける
- ヨーロッパのある教会、入ると一つの音が鳴り響いてる。これは300年後に演奏が完結する音楽の一部が今演奏されている…というもの
- 考えて見ると、新聞小説だってそうかもね。一日毎の予定継続ベルトの内側…

これが、つまり**予定継続的表現**。現代芸術表現の一つね。ただし、その場合は個人でやったり、賛同者のみでやるってことでしょうね。』

🔊『それでね、茜、さらに考えちゃったんだけど、普通に一枚の作品を描くときだって、

「先ず描き始める→これが例えば一ヶ月掛かってやっと仕上がった」

とするわね。そうすると仕上がるまでは“予定継続”なの。だから制作を継続している間は作家の自由時間であり、だからぁ、**“侵害すべからざる作家の自由**“の領域と考えるわけ。その時間が短けりゃ30分だって1時間だってあり得るし、前に言ったように、300年で演奏が完成する音楽表現だってあるわけね。同じことじゃないかな。ルネッサンスからだって、たった500年なんだから、500年かかって完結する表現なんてどう？…、汎美の皆さんの中にもきっとそう言ったお考えの方なんかおられるんじゃぁないかな。ピラミッドなんかも結構長い間かかってんのよね、出来るまで。核無害化なんて10万年て言われてんのよ。また別にね、“公共”“公”“社会的”といったものや人道的見地を組織の表看板にして、実はそれをねじ曲げて集団思想をコントロールしようと言った組

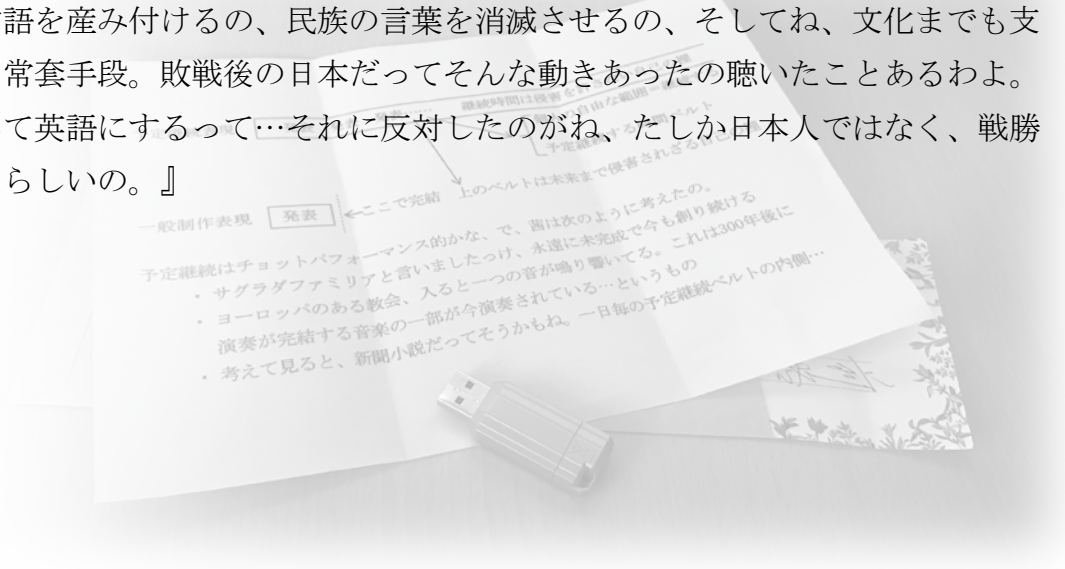
織があったり…なーんてことにも注意を怠ると、知らずの内に結局はあの崇高な「自由への道」を断たれてしまう、という惨めな結果に。これには要注意よ。』

『汎美のＮさんは“制作は続く”“美術活動は続く”って仰っているんですけど、これもいろんな意味を含めて分かるわね。…で、さっきの“予約継続”だけど、天才ってその傾向があるわね。ずうっと予定継続。だから、天才の周りの人は大変、大迷惑。こう言っちゃ失礼かもしれないけど、茜の周りに天才がいなくってよかったわ。うん、ここだけの話よ。でもね、そういった天才でさえも受け入れちゃう社会であって欲しいわ。自由とは、重く、そして守られるもの。

そこで茜は思うんだけど、やっぱり、もうひとりのＮさんでしたっけ、代表の仰る通り、汎美は**「大きな、柔らかい心で正・反も、善・悪ですらも包み込む…」**これね。だから、逆に汎美の一人ひとりがね、チッポケナ意見の違いに腹立てずにさ、逆に汎美という組織全体をも己が呑み込んでしまう程の大きさや大らかさをお持ちになってもらいたいわ。今の世界だってそうよ、これが必要欠くべからざるもの、何しろ今の世界、古代社会と現代社会とが同居してるんだもん…この地球に。汎美のＫさんの仰る「パラレルワールド」。でも何とか生命を大事にして共栄する。その為に如何にするか、ここに人類の「叡智」が生ずるんだわ。「叡智」は人類の偉大な創造なの。そして**「創造はされ続ける」**ものでありたいの。

私なんか、規則やルールやイデオロギーっていうの…?、が苦手で、その上に在るものが「生命＝イノチ」って思ってるの。規則やルールはイノチの下にあるもので、イノチに先行すると必ず戦争に行きつくわね。だからぁ茜、何時も**「意味の果て」**に憧れてんのは、そう言う意味も含めてなのよ。あら、矛盾してるわね、意味だって…。

でもね、こう言うと必ず規則が無きゃあダメダって言う人いるの。それはね、それほどイノチって大事だって事。ルールなし…なんて言っていないわよ。それにね、イノチって人間以外のすべて・万物にもあるんだわ。人類の横暴よ。今時軍備を強化するなんてアナクロニズム（時代錯誤）も甚だしいわ、生命の軽視。軍備の次は何だとお思い？、自分たちの言語を産み付けるの、民族の言葉を消滅させるの、そしてね、文化までも支配するって、常套手段。敗戦後の日本だってそんな動きあったの聴いたことあるわよ。日本語を潰して英語にするって…それに反対したのがね、たしか日本人ではなく、戦勝国の人だったらしいの。』



🔊『こないだチョットTVで見たんだけど、腹立ったわ。何か有名な芸能人らしいんだけど、ルール主義。緊急宣言下でもルールに従ってやってるんだから、感染したってシラネーヨ。自己責任だから、とかいって、他人(ひと)の意見も聞かずに自分の作品を自分が何時何処に見に行く…とかツイッターでね、「おいで」と言ってるわけじゃあないんだけど、当然ファンは行くでしょ。計算尽く。不沈空母＝大衆を手玉にとったお方がおいでになられましたっけ。

茜ね、そんなこと聞くと、ついつい、こんな物語が出来ちゃって、困ったものね。

「あるところに父娘がいて、母は3年前に病死、父親最愛の娘が或る人のファンで、不要不急の外出自粛時だけど、どうしても見にゆくといって、父親の懸命の制止にも拘わらず行ってね、クラスターで死んじゃうの。父親は鬱になって後追い自殺…」

イヴェントのひと、ルール守っていたんだから…ですませられるかしら。法的に責任問われないとしてもさ、毎年西風が泣く頃になると思い出すでしょ。その方だって一生、その苦を背負うのよ。ああ、止めるべきだったなあ…って。歳を重ねれば重ねるほど、その苦に苛まれるでしょうね。人生上の一点の染みでは済まされないでしょう。これがイノチの重み、考えすぎかなぁ…。でもう、あんまり抑制的になっても文化はますますコロナに影響されちゃうし、難しいわね。ところで、あなたは如何お考えなのかしら。』

以上のような内容であったが、茜のモノローグは艶(なま)めかしい臨場感に充ちていた。語る声の背景には遠くのバイクの音、救急車の、そして語り続ける茜の息づかいまでも聞こえたのであった。新しいコミュニケーションの一つとも言えよう。この夜、西風の音が一入(ひとしお)耳に残り、愛娘が嫁いだ後、一人暮らしの茜の孤独感は如何ばかりであろうか。

茜とスケッチに行った紅葉の信濃高原、スケッチブックに鮮紅や黄をしたたらせる彼女の姿にひとしきり黄葉が舞った。そんな光景を想い浮かべ、茜を愛おしく思った。茜もこの西風の韻(おと)を聴いていることだろうと思いながら私は睡りに陥(お)ちたのであった。

(2021.2末／一稿)

「信濃山麓の錦秋」油彩

随　想

汎美について今思うこと

相京 三千代

海の近くに育った私は、毎日学校から帰ると友人と海岸で遊んでいました。

陽が傾いてくると海の色はだんだん濃くなり、夕映えを受けて波は生き生きと輝いてくるようでした。そんな色のハーモニーを楽しんでいました。

私が貝の絵を描くのも、そうした私のノスタルジーからです。そして小さい頃より拾った貝殻は、時を経るにつれて私の部屋の中に溢れてきました。

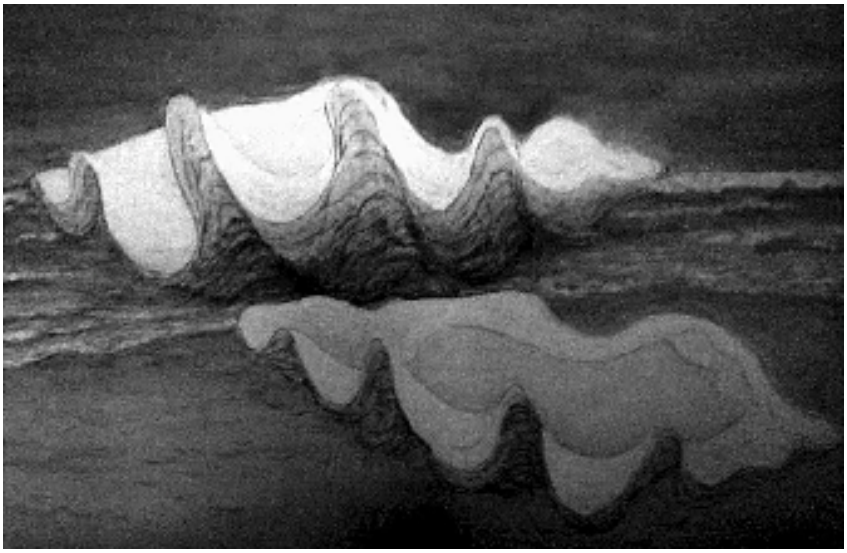
中学生になって油絵を始めましたが、日本画やフレスコ画の方が私の好みにあい、岩絵具を使う日本画に変更しました。画家になる積りはなくただ絵を描くことが好きなだけでした。

そんな時、黒沢さんから汎美に出してみないかとお誘いを受けて、どのような絵を描こうかと考えたとき、やはり海、貝への郷愁（ノスタルジー）を描きたいと思いました。今振り返ってみても初期のころの作品が一番私らしくて良いと思います。それはその絵の中に私の貝への思いが凝縮していると感じるからです。人に見せる為に描いたのではないので、他人から見たらどう思われるかを意識していない絵が一番良い作品だと思います。

今、汎美について思うことは、作品の種類が以前と違ってきていると思われます。絵とデザインはその作品の目的が違うと私は考えています。

両方とも芸術であることに違いはありませんが、私が願うことは作品に表現者の魂がある作品を展示してほしいと思っています。汎美がこれからも絵を愛する人々の意識高い集まりでありますよう。

（令和3年2月7日）



汎美と私の絵心

根岸 節

私は1990年、アンコールワット見たさに、SVAC（国際ボランティア会）に入会しました。

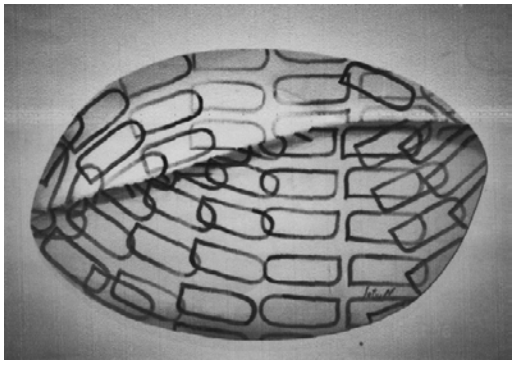
SVAはインドシナ半島の国々の子ども達への支援活動を行っていたのです。私はタイ、ラオス、カンボジア、そして山岳民族であるモンの人々や、子ども達との交流をするようになりました。特にカンボジアでは内戦の悲惨さに、恐怖を感じてしまいました。足は泥だらけ、手も泥だらけ、その手で私の手をにぎってくる子ども達、顔も泥だらけ、しかし子ども達の目は澄んでいて、輝いていました。

アンコールワットはジャングルを通り抜けると現れました。ジャングルの中、アンコールワットの周囲には、所々ドクロの表札、これは地雷の撤去が来たという印です。銃を持った民兵もいました。最初は一列に並び一本の線になって見学しました。アンコーワット以外にも、石の彫刻はたくさんあり、それらの入り口には必ずナーガの彫刻がありました。ナーガに興味がわき、私のナーガを彫ってみようと思いました。彫るために、柔らかい石として、大理石を選びましたが、石は重く、私に運べる大きさのものを用意、ノミヤスリ、金づち等も用意して、夜半になってから部屋を閉め切り、ノミでガンガンと、石の粉の舞う中、数時間、毎日、毎日、家族からは嫌がられましたが、数年間続けて、汎美展にも出品しました。会場の真ん中に、小さな作品がポツンと、目立ちませんでした。汎美の人達の反応は？でも私はその時期、彫刻家になったような気分を味わっていました。

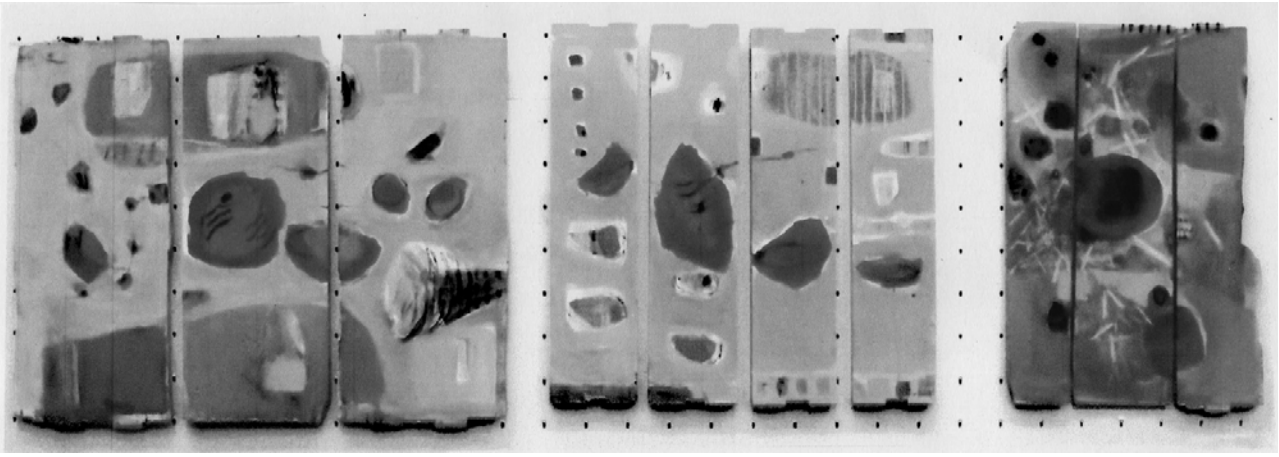
大理石がまだ残っていましたが、重く動かすことができず、今は植木鉢の台になって、役立っています。

ナーガの形をベニヤ板に表現してみることにしました。石は形のみの表現でしたが、平面にすると、空間の中での表現が必要になり、難しさを感じました。10年近く、この形をベニヤ板の中で表現しましたが、あまり完成度を感じることはありませんでした。ひとつの形にこだわり過ぎたのか、描き足りなかったのか、結局止めることにしました。

アンコールワット
「ナーガ」から



「ナーガ」を
ベニヤ板で



「ある日の右手」

不要になった桐の箪笥を壊すことにしました。桐は軽く、私の手で簡単にできそうです。ゆっくり、ていねいに解体していくと、いろいろな形が表れました。感動です。解体した桐の箪笥の木々に愛情がわき、このことから、古い桐の箪笥を解体することが私の趣味になりました。形の一つを手に取り、その中に空間を埋める作業というか、作品作りをするようになりました。別の違った形を選ぶと、違った空間から作品が生れてきます。この様な方法で作品作りを続けていました。

地方の友人から、不要になった桐の箪笥を送ってくださるとの連絡、その時、残念ですがお断りしました。私は一昨年頃から、右手の指の動きが悪く、指の専門医にかかっていました。そして手首から12cm位の所を開き手術をしました。神経をつないだのでしょうか？先生はその手術の写真を撮って、私に見せて下さいました。私は、ギョ！ 桐の板に「私の右手」として描きました。その作品の写真を先生に見せました。先生、ギョ！ 3回の手術で5本の指は動くようになりました。今は5本指に力が出るようリハビリに励んでいます。ということで、桐の箪笥を解体する趣味は、遠ざかっていきました。

＊　＊　＊

一昨年、家の庭に子猫が迷いこみ、10月のすごい嵐の時、家の中に入れてあげました。

そして我家の子供となり、チビタと名づけました。今は大きくなりいたずらっ子で、家の中をガリガリ壊しています。障子もチビタの爪で穴だらけ、私は和紙を全部張り替えず、色のある和紙を加え、手でちぎって穴に張ってみました。昼間、太陽の光を通すと、立派なアートになっていました。現在は人生100年時代、私はあと20年、何をしようか？ 何を作ろうか？ 何を描こうか？ いろいろ考えながら、汎美と関わっていけたらと思っています。

トランペットと作品制作

渋谷 淳一郎

趣味として、私はトランペットでファンクのセッションによく参加している。コロナの中、セッションの頻度が減っているが、それでも、実家に通いながら週2のペースで練習に明け暮れている。何にはまってるかというと、ソロパートにおける即興演奏である。私の参加しているセッションは、曲を決めないでキーとコード進行だけで各々が曲を作曲しながら、ひとつの曲にまとめ上げるという特異なものである。人によっては、好きなアーティストのフレーズをコピーして演奏する人もいるようだが、私はそこをすべて即興で行う。

一からひらめきで曲を作る作業は、作品制作にも相通じるところがある。一本の線を引いたり、粘土で形を作ったりするとき、そこには即興的な要因が存在すると思う。そこには、おそらく無意識的な精神内部におけるプロセスが存在するはずである。即興演奏も同じである。無意識的なひらめきがきっかけで、一つのフレーズなりメロディーラインができ上がる。もちろん今までの経験と記憶によって、自分のひきだしからメロディーラインを作ることもよくあるが、それだけでは斬新なソロ演奏にはならない。そして、この二つの要素のブレンドが妙味なのである。

作品制作においても、決められた線や形などは存在しない。すべては作者の自由である。トランペットのソロ演奏も自由である。この自由の中に創造性があり、また無限の楽しみが存在する。今のこの自分の状況にとても満足している。支えてくれている家族には感謝の一言に尽きる。人生いろいろあるにしても、自分の人生における贈り物に幸福感を感じる毎日である。

社会変化と世代交代に考えること

編集係　三竹 康子

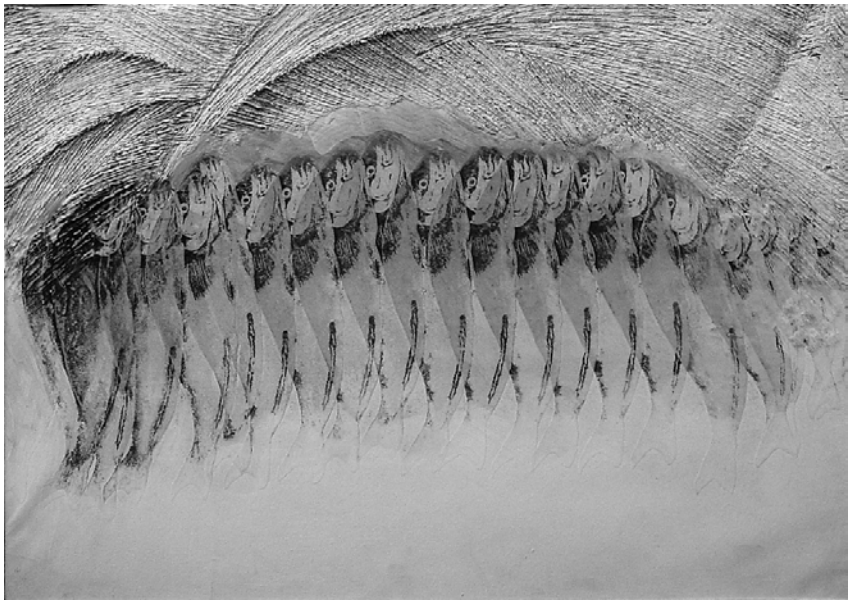
「アラッ、どうしよう」「やれるかな？」地球の片隅の私にも降りかかった困惑のせいです。密集はダメ、マスク必着、会話は小声で等ナドです。汎美術協会は「みんなが等しく支え合い、小さい声も討論して各々が成長していこうではないか（私見）」というカッコイイ集まりですのに、新型コロナウイルスは従来の態勢と姿勢をとれなくしました。冒頭の「やれるかな？」の根拠は私の場合、リモート会議でした。リモートってなに？

食糧難、経済復興、バブル景気、経済成長の中、私は親になりましたが、合理性を何事にも優先させてきたようです。ムダが無い、理に叶うことが優先とはさびしいことでしたから、絵を描いてきたようにさえ思われます。

しかし、アナログを全うして、おのれの知力と鍛えた技術で、さらなる高みをめざすという方々は多いはずと思います。私は慣れ親しんだ身体感覚を修正しなくてはならないと焦りました。

ずいぶん以前から新しい技術としてデジタルデバイスが浸透しはじめ、インターネットが凌駕して、若い方は縦横無尽に操りました。しかし前述のようにデジタル環境を身体感覚として受け入れない方々も居ます。慣れ親しんだ環境が快く、切磋琢磨して来たアナログ環境の素晴らしさを大切に保持していきたいという方々です。

未来に向け美術を、現代美術を問いねがう団体は世代交代を受け入れなくてはなりません。現在、汎美便りの編集長はOさん、手書き投稿のデータ化はSさん、編集テーマに沿って投稿依頼する三竹で「汎美便り」データファイルを作製しています。長きにわたって「汎美便り」を作られたOさんは世代交代を念願しておられます。かく言う私も視力障害者になり、手触りで絵を描く者です。ここのところの3冊（39, 40, 41号）については事務局のお働きに助けていただきました。



私が入会した頃の汎美便りは、長く絵を描いて来られた方々の筆跡もまぶしいコピー綴りの冊子でした。柔らかい仲間同士の想い集。

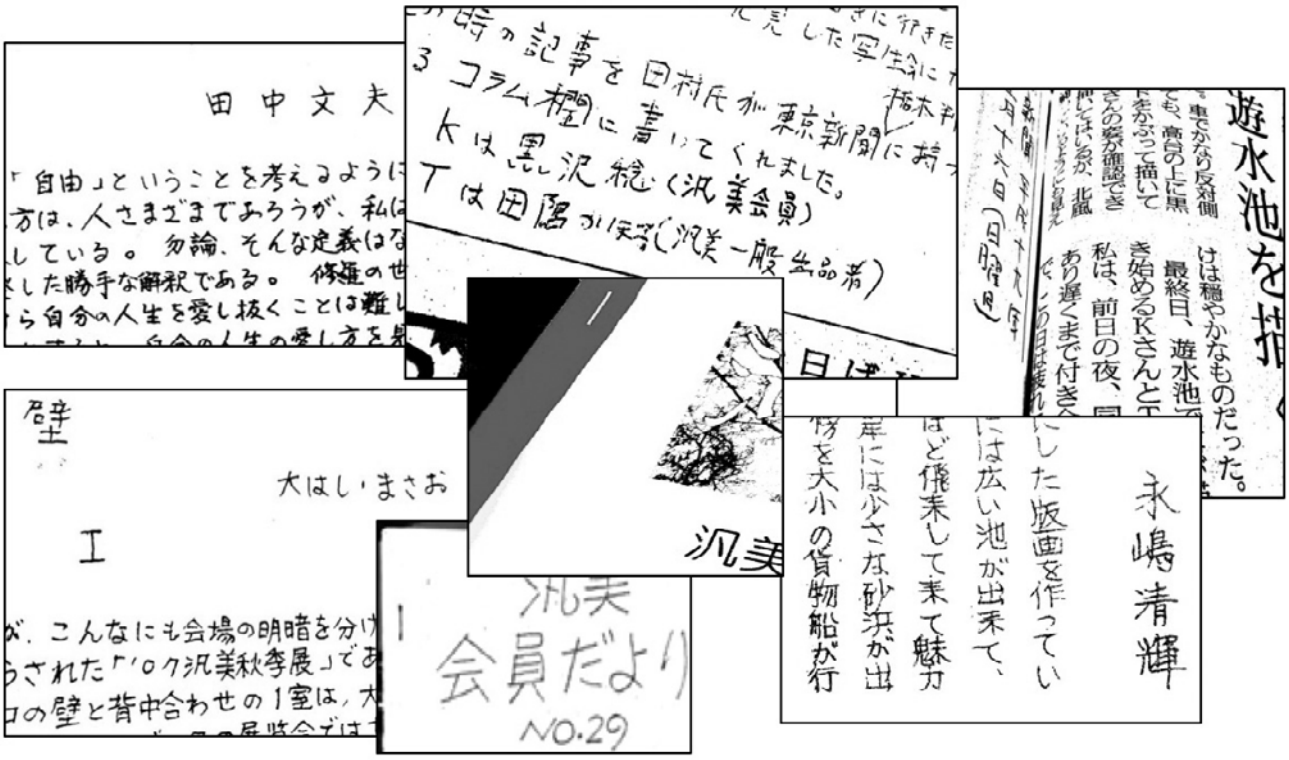
20数年も前のことでした。

アナログ時代の汎美便り

アナログ時代の「汎美便り」、初期は勿論ガリ版の手刷り、No.15とNo.29の部分抜粋です。15号の頃は未だ手書きが主流で29号辺りになるとワープロが出回ってくる。因みに本号はNo.42号だから時流須臾なることに驚愕します。

ガリ版といえば知らない方も多いと思いますが、孔版の一種で蝋の原紙をやすり板の上に置き、鉄筆なるもので書くという原紙、いな「原始」的なものであった。遙か昔の物語とあいなりました…。

第四次産業革命とも言えそうな時代になってきましたが、よく「不易と流行」と言われますが、変わるものと変わらざるものとがありましょう。その両者を見極めながら春秋の流れに棹さすことといたしましょう。将に行雲流水を眺めるがごとくに…。



編集係　三竹 康子・渋谷 淳一郎・大辻 敏成

巻末付録

邂逅のおんな達

（あるフレーズが隠されています）

汎子（ひろこ）

富子（**と**みこ）

伊佐子（**い**さこ）

美樹（みき）

和歌子（**わ**かこ）

憲子（**の**りこ）

実子（**じ**つこ）

仁穂（**に**ほ）

瑠美（**る**み）

由美絵（**ゆ**みえ）

亜沙子（**あ**さこ）

季美（**き**み）

つかさ

玲子（**れ**いこ）

守子（**も**りこ）

京子（**きょう**こ）

歌須美（**か**すみ）

千佐子（**ち**さこ）

和子（**か**ずこ）

志津子（**し**ずこ）

衣紗江（**い**さえ）

友子（**と**もこ）

隠しフレーズのヒント；
名前の**太字**を
繋げて読んでください。
答えは編集後記の文中に
有ります。(O)

編　集　後　記

新型コロナ、第四次産業革命の濫觴、歴史の先祖帰り、汎美展の延期…等々、いろいろあった2020年度でしたが、万物平等に、春の美神・佐保姫は春を引き連れてやって来ました。ボッティチェリの「春の三美神」の様に生命を大切に、創造表現の発表を次回の汎美展に繋ぎましょう。“明日のない今日はない”**「汎美術協会 永遠（とわ）にあれかしと祈る気持ち」**です。なお、ご投稿の方々、ありがとうございました。　(0)

［ 汎美便り 編集係 ］ 渉外:三竹 ／ デジタル化:渋谷・大辻 ／ DTP纏め:木虎

汎美便り vol.42

発 行　2021年3月

汎 美 術 協 会　事 務 局
〒168-0074 杉並区上高井戸 2-4-10 大野善孝方